

大草谷津田いきのもの里 自然観察会

里山のくらしの知恵

佐野由輝（大網白里市）

日 時：2012年12月2日（日）10：30～12：00 天候：晴れ

参加者：6名（大人6名）

担当指導員：佐野由輝、山岸文子

まず、はじめに、千葉市の森林の様子の移り変わりを示し、昭和50年代以前の、かつての千葉市における身近な森林はアカマツ林であり、松くい虫被害のまん延により、アカマツが激減して今のような森林の姿になったことを認識してもらいました。 続いて、実際の森の中に入り、最初のポイントである竹林では、竹がいかに身近であるかを知つてもらうため、某百円ショップでは、筆や定規、竿、熊手、食器類など竹製品が28品も売っていたことを紹介しました。プラスチック製品で埋もれている現代でさえ、これだけの竹製品があるのですから、昔の人は竹を農具、漁具、生活用具、あらゆる物に利用していたことでしょう。さらに、スギ林では、「板目を樽」、「柾目を桶」というスギ材の利用法を例にして、昔の人が木の性質を熟知した上で、木を使っていたかを紹介しました。樽と桶にも昔の人の知恵が隠されていることに参加者の皆さんも驚いていました。

谷津田では、地形図を見せながら、樹枝状に広がる谷津が千葉県の特徴的な地形であり、周りの森林からわき出る水を利用して古くから田んぼとして利用してきたことを説明しました。谷津田周辺の森は、定期的に伐採してきた結果、株立ちしているクヌギやコナラが見られました。

田んぼの稲刈りは既に終わっており、稲田となっていましたが、稲わらの利用方法として、わら草履やこも巻きを紹介しました。大草では、数年前から田んぼのそばの樹木の幹に、こも巻きをしています。因果関係を証明することは難しいですが、こも巻きをするようになって以降、収穫した米に含まれる斑点米の割合が少なくなったようです。こも巻きの結果、カメムシを食べる益虫が増えてきたのかもしれません。

谷津田から急な坂道を上る途中には、間伐した竹を編んで作ったしがらみが、土の崩壊を食い止めている様子が見られました。その坂を上ると、明るい広葉樹の森になります。ここには、約40年前まで利用していた炭焼きの跡があります。卵形に積まれた石垣と釜口が、当時の姿を偲ばせます。この場所では、長さが60cmの大型の炭が焼かれていたようです。炭焼き窯の作り方や、千葉県が炭の一大生産地だったことなど、しばらく、炭焼き談義に花を咲かせました。

明るい森を抜けると一転、常緑を中心とした薄暗い森になります。ここには、おそらく大草の中で最も長生きであろうと推定されるシラカシの大木があります。檜の木は、実も葉も枝も幹も全て有効利用できるまさに宝の木なので、家ごとに必ず植えるようにと奨励されていたことを紹介しました。檜の木には15も長所があるのだから、驚きです。

最後に、若いスギ林に入りました。スギ林の中に1本だけアカマツが残っていました。1本だけ残ったアカマツの木の前で、千葉県の伝統的な林業樹種である山武杉の仕立て方は、アカマツ林の下木としてスギを植える2段林方式で育てていたことを紹介しました。

この日に紹介できた知恵は、ほんのわずかではありますが、こうした、昔の人たちの暮らしの知恵を大切にしたいとしみじみ感じつつ、観察会を終えました。